

バウムの描画位置に関する研究：
なぜbaumはやや左に描かれる傾向があるのか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4546

バウムの描画位置に関する研究

—なぜバウムはやや左に描かれる傾向があるのか—

奥田 亮

臨床心理学専攻准教授・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究では、バウムテストにおいて幹の中心位置がやや左寄りに描かれる傾向がなぜ生じるのかについて検討した。仮説として、用紙の左右中央位置に幹を描こうとせず左の幹側線を描くと、目測を誤ってイメージしているよりも幹幅が太くなる位置に幹左側線を描いてしまう傾向があるため、右の幹側線を描く段階で幹幅を細めに補正することにより、幹の中心位置がやや左にズレるのではないかと考えられた。そこで調査では、バウムを用紙の左右中心位置に描くことをイメージして幹の側線を一本引くよう教示し、用紙の左右の中心線を軸に最初の側線と左右対称となるようなもう一本の幹側線を引いてできた幹の太さがじっくりくるか尋ねた。その結果、左幹側線から描いた調査対象者の3割弱が、より細い幹幅がイメージに合うと回答し、仮説を裏付けるデータが得られた。ただし他の要因が影響している可能性も否定できないため、より詳しい調査が必要と考えられた。

キーワード：バウムテスト、描画位置、左寄り

I 問題と目的

描かれた木から描画者の心理的な特徴を読み取りろうとするバウムテストや樹木画テスト（以下、本稿ではバウムテストと記す）においては、しばしば解釈の一視点として用紙上の位置について検討される（Koch, 1957/2010；Bolander, 1977/1999；Stora, 1975/2011等）。その際には空間象徴仮説も活用され（林, 1994；高橋・高橋 2010等）、例えば用紙の左寄りに描かれた木は「内向的である面と母親の影響を強く受けている面が予想される」（中村, 2017）といったように、木の描画位置によって一定の解釈がなされる。

ところで、バウムテストに関する調査研究では、多くのバウム（調査対象者によって描かれた木）を収集して、その空間上の位置に関するデータが分析されているが、それらの研究を概観すると、全体としてバウムは左寄りに描かれることが多いことに気づく。このことをデータではっきり示し

ているのが、一谷ら（1989）の研究である。一谷らは、幼稚園児（年少）から高齢者（70歳代）まで1438名を対象に、A4用紙上に描かれたバウムの位置が発達のどのように変化するのかを調べている。その結果、幹中心部の位置を計測して平均すると、全ての年代で一貫して画面中央より左側にあり、幼少期には中央より平均1.2cm左側に位置するのが、加齢とともに徐々に右へ移動していく（中央に寄っていく）という¹⁾。

もしバウムが標準的に幾分左寄りに描かれるならば（一谷ら（1989）の研究では、全年代の平均は紙面中央より左0.8cmの位置に幹の中心がくる）、わずかに左位置にあるようなバウムを「左に偏っている」として空間象徴仮説を援用して解釈することには慎重でなければならないことになる。

例えば加曾利（2004）は、バウムテストと精神的健康（GHQ）との関連を分析した研究の中で、

紙面を4分割した時の描画の空間使用量のうち、左上部を使用しているほどGHQ得点が低い（精神的に健康）という結果を報告している。高崎ら（2011）も一般成人80名のバウムを画面4分割してテクスチャー解析を行い、左上の領域の描画量が多いと抑うつ得点が低いことを報告している。これらは単に左上部の空間使用量の多寡というより、元々やや左側にバウムが描かれる傾向がある中で、精神的健康さや抑うつ感の低さと関連してバウムが大きく描かれるようになると相対的に左側の使用領域が増すために示された結果、という可能性も考えられる（図1）。これら以外にも、バウムの紙面上の位置や使用領域の傾向と描画者の特徴との関連が、平均して若干左位置にバウムが描かれること（またバウムは幹や根が描かれる下部より樹冠が描かれる上部の方が紙面の使用領域が大きくなること）に起因する結果であると推測される研究も散見される。ちなみに、バウムの樹冠部の左右比は平均するとおおよそ10:11.3で右側の方が大きくなるのが、コッホによって示されており（Koch, 1957/2010）、同様のことは日本でも山下（1982）によって確認されている。これも、紙面に対して中心となる幹の位置がやや左に位置し、その分空間的に紙面上部はやや右が広がるため、樹冠部は右側が大きくなる傾向が出やすくなるのかもしれない（図2）。このように、元々バウムが少しばかり左側に描かれやすいことを念頭に置いておくと、調査研究においても臨床場面で描かれた木を見る際においても、その結果の解釈が幾分違ったものになるであろう。

ではなぜバウムは左寄りに描かれやすいのだろうか。一谷ら（1989）は、中央よりやや左が最も気分の安定する・落ち着く場所であるためではないか、と述べている。すなわち、潜在的にか意識的にかは明確でないけれども、気持ちの安定する場所を志向して、紙面に対して若干左側に木を描く傾向が一般に生じる、ということである。そもそもバウムテストでは、紙面の中央に描くことは教示段階で指定されていないので、そのような志向性が反映されてもおかしくない。

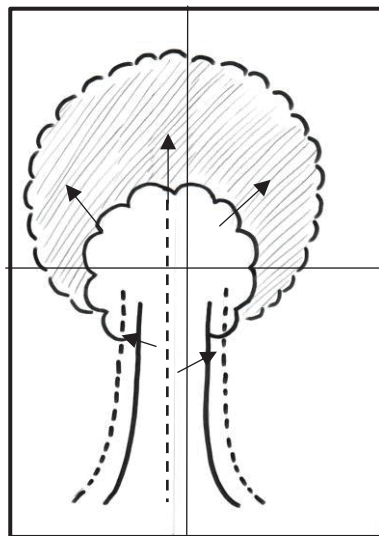


図1 左寄りのバウムが大きく描かれると左上の領域の空間使用量が増える

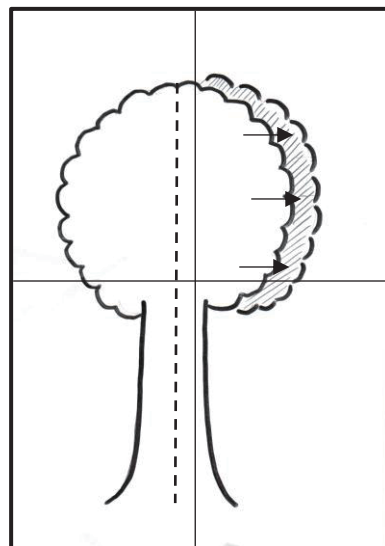


図2 左寄りにバウムを描くと右の空間が空くため樹冠部の右が膨らみやすい？

あるいは一つの仮説として、空間象徴としての左空間の意味合いと日本文化との関係、という可能性も指摘しうるであろう²⁾。日本人の国民性や文化として、“内向的で母性的影響が強い”と言われることから、日本においてバウムテストの調査を行うと、やや左に位置するバウムが多くなる、

という考えである。

ところが、濱野ら（2007）がカメルーン、バリ、中国（麗江）、バングラデシュ、スリランカ、ルーマニアで行ったバウムテストの調査では、全ての国において、紙面を4分割した領域を比較すると、上部でも下部でも一貫して右側より左側の領域の方が空間使用率が高く、文化に関わらずかなり普遍的に左寄り傾向という現象が見られるのである。

ここで本研究では別の仮説として、幹の太さの想定（目測）を誤ることの影響を挙げたい。バウムは幹の左側の線から描かれることが多い（おおよそ7~8割）ことは、佐渡ら（2012）の研究をはじめ、バウムの描画プロセスの記述に関わって筆者も何度か指摘してきたことである（奥田、2018）。そのため、描画用紙の中央部に幹を描くことをイメージし、幹の線を左側から書き始める時には、用紙の左右のちょうど真ん中から幹の幅の半分ぐらいをイメージして幹左側線を描くことになるが、この幅を思ったより太く取ってしまうのではないか、という仮説である。この着想は、次のような経験から得たものである。

左右対称の切り絵を行う時、紙を縦に半分に折り、折った状態で紙を切り抜いて広げると、左右対称の切り絵が完成する（図3）。こういった切り絵をしていて時々経験するのが、「広げると、思ったより幅が太い」ということである。バウムで考えると、左右対称の切り絵を切り抜くために、図のように切り取り線を描いて切ったら、思いのほか幹が太くなった（横幅が広がった）というものである。これは、思っている太さの半分を想定して折った紙に描いたところが、実際にはそれでは幅が大きすぎる、ということである。

これをバウムを描く場合に擬えると、紙面左右の中央位置にバウムを描くことを想定して、おおよその幹の太さの半分の幅を中央から取ることをイメージしつつ幹の左側の線を描いても、思ったより太めに、すなわち左寄りに描いてしまう...それで実際に自分の幹の太さのイメージ通りに幹の右側の線を描いてみると、結局幹（バウム）の中

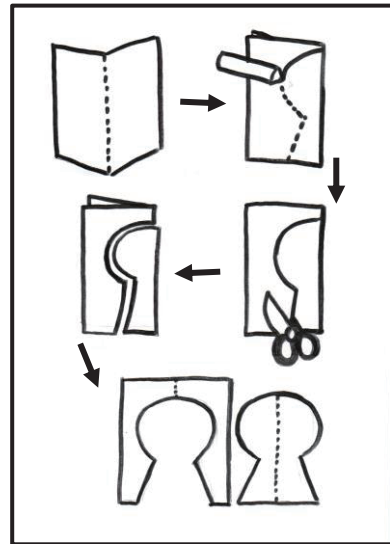


図3 紙を縦半分に折って左右対称の図を切り取る

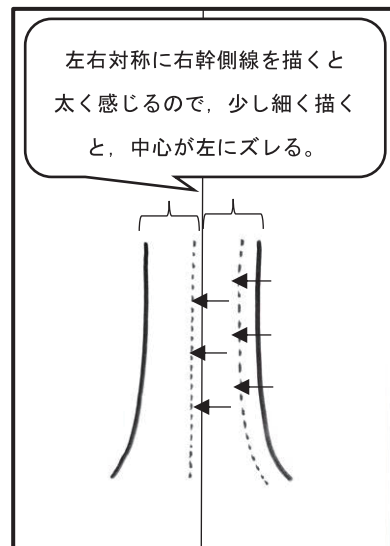


図4 幹の左側線を思ったより太く描いてしまう？

心軸が左側に寄ってしまうのではないか、というものである（図4）。

では、初めから中央位置にバウムを描くように教示してみればどうであろうか。もし一谷らが考察したように、元々紙面のやや左側が安心できるので偏るのであれば、真ん中に描くように最初に指示することで、やや左に位置することは見られ

なくなると考えられる。しかし幹の太さの目測を誤ることによって左に寄るのであれば、中央位置に描くように指示しても、左に寄ることは起こるであろう。

そこで本研究では、調査対象者に対して、1) A4白紙を縦に置いて、木を左右位置の中央に描くようイメージして、まず幹の側線を片側のみ描くことを教示する、2) 白紙を縦半分に折り、描いた側線と左右対称の線をなぞらせる、3) 出来上がった幹の太さが調査対象者の感覚(イメージ)にどの程度一致しているか確認し、より一致する側線(幹の太さを決定する線)の位置があれば加筆させる、という手順で、調査を行うことにした。左右の中央位置に描くように教示しているため、少し左側の方が安心できるから左に寄る、というような現象は見られないはずであるが、も

し太さの目測を誤って幹を左位置に描いてしまうのであれば、左右対称の2本目の線は、太く感じられ、よりぴったりくる幹の線を描くと、結果として幹の中心位置はズレると予測される。

II 方法

調査対象者: 女子大学生 102 名, うち有効データ数 100 名 (平均年齢 19.3 歳, $SD=1.34$)

調査日: 2019 年 11 月

手続き: 大学の授業内で調査を実施した。教示は表1のとおりである。

幹幅の測定 (図5参照): 左右対称に描かれた幹の側線(教示の①と②の側線)の上端と下端をそれぞれ直線で結び、その幹上下端の線の中央を結ぶ線を引いて、さらにこの中央縦線の上下中央位置における①と②の幹幅(太さ)を測定した(幹

表1 課題の教示

1. 白紙を縦置きにして、目の前に置いてください。
2. 今から、その紙の中央に“実のなる木を一本”描くつもりで、まず木の幹の片方の線を描いてもらいます。幹の片方の線とは、幹を描く時に左右に引く二本の線のうちの、どちらかの線のことです。右からでも左からでも構いません。まず一本引いてください。その時、木が紙の左右の真ん中に位置することをイメージしながら、引いてください。
3. 今引いた線の下に「①」と記してください。そして、紙を裏返してください。紙を透かして、今引いた線が見えると思います。その線をなぞって、表面に描いた幹の線と同じ線になるように描いてください。
4. 次に紙を縦に半分に山折にして下さい。山折にしたら、今度は先ほど裏面に引いた線が透けて見えると思いますので、またその線をなぞってください。そして、その線の下に「②」と記してください。
では、紙を開いてください。表面に引いた①と②の二本目の線は、中央の縦の折り跡を中心に、左右対称になっているはずですが、確認してください。
5. 今、二本の線で幹が描かれました。では、この幹の幅・太さは、あなたの思い描いていた木の幅・太さのイメージと合いますか・しっくりきますか?もしイメージと違う・しっくりこない、という場合は、よりしっくりくる幅・太さの線を、「①」の線を基準にして、あらためて二本目の線(幹のもう片側の線)を引きなおしてください。先ほど引いた②の線は消さないでください。そして、引きなおした線の下には「③」と記してください。先ほどの②の線で描いた幹の太さ・幅がしっくり来る人は、3本目の線は引かずに、②の下に③と記してください。
6. 最後に、紙の右下に、あなたの利き腕(今、どちらの手で木を描いたか)を記してください。

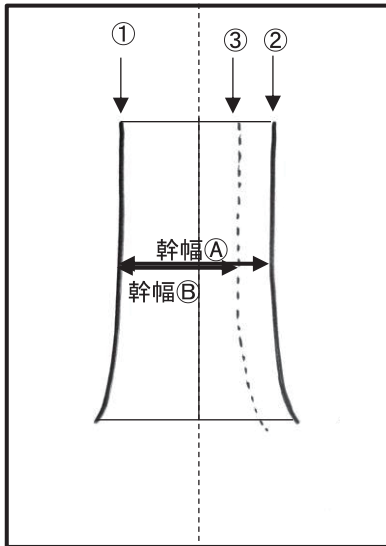


図5 幹幅の測定

幅(A)；最初に幹側線を描いた時点で想定される幹幅を示す)。次に先ほどの上下中央位置の①と③の幹幅を測定した(幹幅(B)；よりイメージと合う幹幅を示す)。幹幅の測定は0.5mm単位で行った。

倫理的配慮：本研究は、大阪樟蔭女子大学研究倫理委員会の審査を受け、研究計画の承諾を受けている(承認番号：19-23)。

III 結果と考察

データが有効であった調査対象者100名のうち、幹の側線を左側から描き始めた者が81名(81.0%)、右側から描き始めた者が19名(19.0%)であった。問題で述べたように、本研究でも8割程度の者が左の側線から描くことが示された。

次に、まず幹の片方の側線①を描いて、中央の軸でその側線と対称となるもう片方の側線②を引いて幹を構成した場合、その幹の太さ(幹幅(A))が想定しているイメージ通りか、イメージより細い方がしっくりくる(①と②で幹を実際描くと、その幹幅(A)がイメージしていたより太い)と感じるか、その逆でより太い方がしっくりくる(実際描かれた幹幅(A)がイメージより細い)と感じるかについて、被調査者に尋ねた結果について述べる(表2)。

幹を左側から描き始めた場合、その幹の幅がイメージ通りで想定と変わらない、と答えたものが70.4%(57名)と最も多かったが、初めに思っていたより細い幹幅がしっくりくる者が27.2%(22名)、太い方がしっくりくる者が2.5%(2名)であり、3割弱の調査対象者が、「幹はもっと細いイメージだった(初めの側線で紙面の中央縦軸を中心として左右対称の幹を構成した場合、太すぎる)」と感じていることが明らかになった。これは、教示にもかかわらず、はじめに描いた幹の(左側の)側線が、思ったより左側にズレて描かれた、ということを示唆する。そのため、よりしっくりくる太さの幹側線③を描くと、幹の位置が左寄りになってしまうのである(図6上)。

これらの結果は、バウムが平均的に左側にやや位置するのは、幹の左側から線を描き始め、そこで本来描こうとするより左側に側線を描いてしまうことが一つの要因であるとする仮説を支持すると考えられる。

ただし、右から描き始めた場合には、同様の現象が必ずしも見られない。もし幹幅の目測を誤る

表2 イメージと合う幹の太さは左右対称に描いた幹幅と同じか/太いか/細いか

左右対称に描いた(①と②の)幹幅(A)について	左から幹側線を描いた場合	右から幹側線を描いた場合
より太い方がイメージと合う	2 (2.5%)	3 (15.8%)
幹幅はイメージと同じ	57 (70.4%)	13 (68.4%)
より細い方がイメージと合う	22 (27.2%)	3 (15.8%)
合計	81 (100.0%)	19 (100.0%)

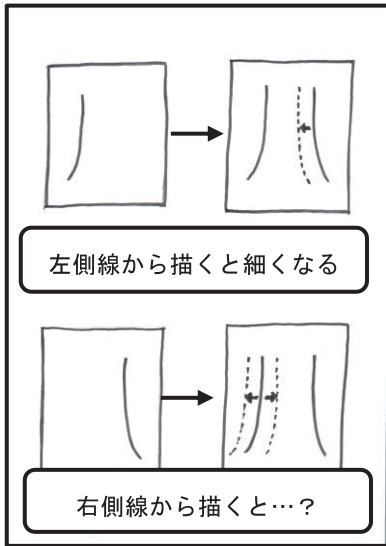


図6 幹幅のズレ

のならば、右から幹を描く場合にも細い方がイメージと合って、右寄りに位置するはずであるが、そのような結果は示されなかった(図6下)。幹の側線を右から描いた調査対象者があまり多くないため、はっきりとしたことは言えないが、右から

幹を描いても左に寄る描画者が右に寄る描画者と同程度出現するという事は、他に幹位置を左に寄せる要因があるのかもしれない。これについて検討するためには、例えば「右から幹線を引く」ように教示を行うなど、右側線から描いた場合にどのようなことになるかについてさらに詳しく調べねばならないであろう。

なお、より細かなデータとして、左右対称に描かれた幹幅②と、よりイメージに合う幹幅③との差(②と③の差)がどの程度であったかを表3に示す。全調査対象者について平均すると3.8cm程細い方がイメージにじっくりくる、すなわち幹の中央位置が1.9mm程左にズレる、ということになる。これは一谷ら(1989)の報告よりも左へのズレの程度が大きく、今回の調査の条件が何らか影響した可能性も考えられる。

また今回の調査では教示で「木が紙の左右の真ん中に位置することをイメージ」して幹側線を描くように指示したが、この中央位置のイメージ自体が、既に左にズレてしまっていた可能性も否定できない。右利きでバウムを描くと、右手自体で

表3 左右対称に描いた幹幅②とイメージに合う幹幅③との差

	よりイメージに合う幹幅との差(幹幅②と③の差)(mm)	左から幹側線を描いた場合(人)	右から幹側線を描いた場合(人)
より太い幹幅のイメージ	31以上	1	0
	30~21	0	2
	20~11	1	0
	10~1	0	1
同じ	0	57	13
より細い幹幅のイメージ	1~10	1	0
	11~20	1	0
	21~30	6	2
	31~40	6	1
	41~50	4	0
	51~60	2	0
	61以上	2	0
合計		81	19

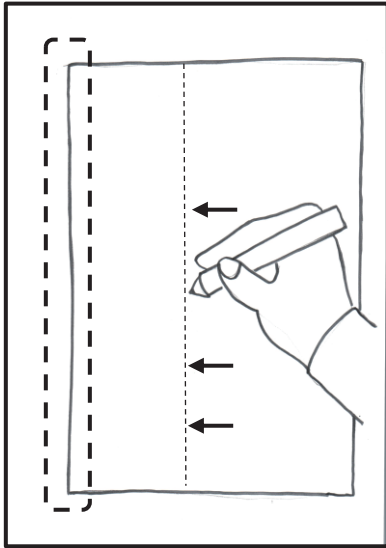


図7 用紙の左端辺が意識され、絵の中心軸が左に引っ張られる？

紙面の右側が大きく隠れてしまう。実際に何度か幹の左側線を右手で描くことを吟味してみると、紙面の右側から右手が入っていく時に、基準となるのが紙面の左縁である感覚があることに気付く。その右側の境界・枠を頼りにして、バウムの位置や幹側線を描いている意識がどこかあるように思われる（図7）。そこで中心軸が左に引っ張られてしまうのかもしれない³⁾。これを防ぐために、例えば左右の中央線をはじめからよりはっきりと明示して、幹がそれでも（太さの目測を誤って）左に寄る現象が起こるのか、確認する必要があるであろう⁴⁾。

いずれにせよ本研究によって、紙面の中央にバウムを描こうとしても、どこか左に寄ってしまう描画者が一定数（今回の調査では3割弱程度）いることが確認された。この結果をどう解釈するか、上記のようにまだ幾つかの仮説を考える余地があるが、幹幅の想定ズレが一つの要因である可能性が示されたと言えよう。

本研究では、バウムテストの描画位置をどのように考えるかについて、単に空間象徴のみから解釈するのではなく、幹の側線を描く体験とバウムの位置が関わっているという視点のように、より

描画者の描画プロセスに従って考えることの必要性も示すことができたと思われる。ただし、本研究は空間象徴仮説をすべて否定するものではない。空間イメージの左右差は実証的にもかなりはっきり示されており（佐藤，2014）、相当程度左に偏って位置する場合には、何らかの「左位置」に関連する解釈がなされてしかるべきであろう⁵⁾。また今回の調査結果で、幹の左側線から描かれた場合に左への位置のズレが起ることが示されたということは、例えば左の幹側線から描かれたにもかかわらず大きく右寄りにバウムが位置した場合などには、解釈においてその位置取りに着目すべき、ということになるであろう。このことは、描画時の全体状況を見る視点、幹の左・右側線のいずれから描かれたかといった描画プロセスに留意することの必要性（もちろん、そこからどのような描画者の体験や心の動きが考えられるかを理解することが重要である！）にも繋がると言えよう。

注

- 1) 70歳代の平均位置が中央より0.4cm左で最も中央に近く、標準偏差は幼稚園児で2.13と最大で、以降の年代は1.57～0.68の間にある。いずれの年代でも有意な性差は見られていない（一谷ら，1989）。
- 2) この仮説を主張する記述を、筆者はいずれかの文献で見かけた記憶があるのだが、本稿の執筆時点で見つけることができなかった。そこで念のため、この仮説は筆者のオリジナルではないことを、ここに申し添えておく。
- 3) もしそうであれば、「与えられた空間（紙面）の中で、自分で中心軸を見つけ出し作り出すのではなく、抛り所となるもの（紙の左端辺）に寄りかかる感覚で中心軸を決めていく」という、ある意味で空間象徴解釈につながる体験が含まれていることになり、興味深い。
- 4) なお、今回の調査では左利きの調査対象者が2名含まれていた。いずれも幹を左側線から描き、1名は左右対称の幹線がイメージ通り（②＝③、つまり④＝⑤）、もう1名は幹のイメージ

はより細い方がしっくりくる(③が左にズレる, ①>②)という結果になっている。左手で幹を描く状況, すなわち描画時に紙面の左空間が隠れて右空間がより大きく見える状況でも, 左に幹位置がズレることが起こっているため, 2名だけという限定された本調査の結果だけであるが, 描画時の紙面の見え方のみが左寄り傾向を促しているとは考え難いことになる。

5) 目安として, 一谷ら(1989)の研究を基に言えば, 例えば大学生のバウムの幹の中心位置は中央より平均で0.6cm左に位置し, 標準偏差は0.97であるから, 統計的には中心から左へのズレが1.6cm~右へのズレ0.4cmの間に全体の約7割(平均±1SD)が入る, ということになる。この範囲を大きく超えて左右に偏ると, かなり特徴的と言ってよいのではないだろうか。

文献

- Bolander, K. (1977). *Assessing personality through tree drawing*. New York: Basic Books. 高橋依子(訳)(1999). 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版.
- 濱野清志(研究代表)(2007). 樹木画テストの発達指標の普遍因子と文化による固有因子の抽出への試み. 平成15年~18年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書.
- 林 勝造(1994). 「バウムテスト」論考. 臨床描画研究, 9, 3-18.
- 一谷 彊・津田浩一・小林敏子・山下真理子・弘田洋二・松井孝史・林 勝造・国吉政一(1989). バウムテストによる生涯の発達研究 [IV] 一幹中心部の位置と加齢の関係一. 京都教育大学紀要, Ser.A, 75, 1-13.
- 加曾利岳美(2004). 神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴—GHQを用いた定量的分析. 共栄大学研究論集, 3, 106-122.
- Koch, K. (1957). *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3 Auflage. Bern: Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男(訳)(2010). バウムテスト [第3版] 一心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究一. 誠信書房.
- 中村延江(2017). バウムテスト・キット マニュアル. 千葉テストセンター.
- 奥田 亮(2018). バウムの描画に伴うイメージの生起と変容に関する研究. 臨床描画研究, 33, 68-82.
- 佐渡忠洋・鈴木 壯・田中生雅・山本真由美(2012). バウムの描画プロセスに関する研究: バウムはどこから描かれ, 幹はどのように構成されるのか. 臨床心理身体運動学研究, 14, 59-68.
- 佐藤 徳(2014). 未来は君の右手にある—身体化された時間概念—. 心理学研究, 84, 345-353.
- Stora, R. (1975). *Le test du dessin d'arbre*. Paris: jean-pierre delarge. 阿部恵一郎(訳)(2011). バウムテスト研究. みすず書房.
- 高橋雅春・高橋依子(2010). 樹木画テスト. 北大路書房.
- 高崎いゆき・松村 治・岩満優美・竹村和久(2011). 樹木画の統計的画像解析とその解釈—一般成人の樹木画の画像解析結果—. 日本心理学会第75回大会発表論文集, 415.